

氏名 (生年月日)	マツ ナガ リュウ セイ 松 永 瑠 成 (1994年1月5日)
学位の種類	博士 (文学)
学位記番号	文博甲第151号
学位授与の日付	2022年3月16日
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項
学位論文題目	貸本問屋の研究
論文審査委員	主査 鈴木 俊幸 副査 中川 照将・山田 俊治

内容の要旨及び審査の結果

1 本論文の目的

本論文は、日本近世から近代にかけての貸本業の実態とその史的展開を捉えること、就中貸本向けの書籍を制作、また調達して他の問屋、また流通末端の貸本屋に卸すことを業としてこの業界の要となっていた貸本問屋について、その営業の実態を解明することを目指した研究の成果である。貸本問屋という業者が存在していたことについては、これまでも何度か言及されたことはあったが、これについて実態を明らかにした研究は今まで無かった。この貸本問屋の営業実態を捉えることによって、書籍の制作から読者の享受に至る過程において重要な役割を果たしてきた貸本業界全体の構造を捉えることを最終的な目的としている。

2 本論文の構成と概要

2.1 構成

本論文は、序章・終章を含めて全5章で構成されている。目次は以下のとおり。

序章 貸本問屋の研究とその意義

第1章 貸本問屋の史的展開

第1節 丁子屋平兵衛の躍進——貸本屋世話役から貸本問屋へ——

第2節 「中本」受容と大島屋伝右衛門

第3節 大島屋伝右衛門と池田屋一統——売薬「処女香」を端緒として——

第4節 黎明期の初代大川屋錠吉

第2章 貸本問屋の出版書目

第1節 丁子屋平兵衛出版書目年表稿

第2節 大島屋伝右衛門出版書目年表稿

第3節 初代大川屋錠吉出版書目年表稿

(参考) 第二十三回大川屋出版小説図書総目録 (明治三十二年八月改正増訂)

第3章 貸本文化の変容とその諸相

第1節 貸本屋の諸相

第2節 誠光堂池田屋清吉の片影

第3節 近代金沢における書籍受容と春田書店

終章 本論文の到達点と今後の課題

序章は研究目的と意義、論文全体の構成について述べた章である。第1章は、貸本問屋の実態を解明し、その史的展開を明らかにしようとした章。第2章は、本論文で取り上げた貸本問屋それぞれについてその出版書を年表形式でまとめたもの。第3章は、流通末端の貸本屋の営業実態の事例を時代の変遷をにらみながら個々具体的に明らかにしたものである。終章は、標題どおり本論文がなしたところと残された課題について述べている。

2.2 概要

第1章から第3章まで、各章ごとに以下概要をまとめてみる。

2.2.1 第1章「貸本問屋の史的展開」

第1章「貸本問屋の史的展開」は、江戸貸本問屋の中核と目される丁子屋平兵衛・大島屋伝右衛門・大川屋錠吉それぞれの営業内容を捉える中で、貸本問屋としての貸本業界・出版業界における役割をあぶり出し、その歴史的意義を明らかにしている。また重なりながらも主とする営業時期の異なるこの3店を追うことによって、近世から近代までという長い時代的括りの中で貸本問屋の営業の変化をたどる試みでもある。

第1節「丁子屋平兵衛の躍進——貸本屋世話役から貸本問屋へ——」では、初代から3代目にわたる丁子屋平兵衛の足跡をたどる。すなわち貸本業として本屋を始めた初代が貸本屋世話役の一人となり、出版も手掛けるようになって丁子屋発展の礎を築いたこと、2代目が曲亭馬琴著作出版に深く関わるようになって丁子屋は貸本問屋として全盛を迎えることを資料と先行研究を使って要領よく整理している。その上で、貸本問屋とはどのような業態の商売であったのか、丁子屋がどのように書籍流通網を保持し、また拡張していったのかについて考察している。

第2節「「中本」受容と大島屋伝右衛門」では、中本版元として知られている大島屋伝右衛門を取り上げている。その三代にわたる系譜と百年にわたる代々の出版活動を明らかにし、大島屋の形成していった書籍流通網について考察している。その中で、中本が営業の柱となっていたこと、貸本問屋丁子屋平兵衛・河内屋茂兵衛との密接な関係性を持っていたことを明らかにしている。

第3節「大島屋伝右衛門と池田屋一統——売薬「処女香」を端緒として——」では、大島屋が製剤・販売していた「処女香」の広告や引札を資料として、貸本問屋大島屋が形成していった流通網

の一相を浮かび上がらせている。とくに当時有名であった貸本屋池田屋清吉をはじめとする池田屋一統との結びつきを明らかにした上で、近世から近代にかけての大島屋の書籍流通戦略の展開について論じている。

第4節「黎明期の初代大川屋錠吉」は、講談本出版で盛業を誇った大川屋錠吉を取り上げる。そもそも彼の営業の柱は貸本業であったが、それが、出版を盛んに手がけるようになっても継続されていたことを明らかにし、彼が貸本問屋として成功するにいたる営業基盤について論じている。また、3代目大島屋武田伝右衛門やせどりなどとの関係を、多く求版本である大川屋出版物の分析から明らかにし、大川屋の多岐にわたる書籍営業の実態を明らかにしている。

2.2.2 第2章「貸本問屋の出版書目」

第2章は、第1章で俎上にあげた貸本問屋丁子屋平兵衛・大島屋伝右衛門・大川屋錠吉の出版書を、詳細な書誌情報とともにそれぞれ編年体で整理したものから成っている。また、大川屋錠吉については、書目を補完するために明治32年発行の『第二十三回大川屋出版小説図書総目録』の翻刻も掲げている。すなわち、第1章の各論の依って立つ基礎データを示して第1章を読み解く参考資料となっている章である。

2.2.3 第3章「貸本文化の変容とその諸相」

第3章は、幕末から明治・大正期における貸本屋の営業の具体的様相を、複数の事例について資料の分析を通じて明らかにしようとした章である。時期や地域、また業態を異にする事例をとりどり取り上げており、自ずと日本の貸本文化全体の流れを物語るものとなっている。

第1節「貸本屋の諸相」では、幕末に営業していた貸本屋小林某と大坂の春日堂播磨屋伊三郎の蔵書内容や日々の営業の様相を、主に貸本の裏打ちに使用された営業文書の断片の分析から明らかにしようとしている。

第2節「誠光堂池田屋清吉の片影」は、坪内逍遙や岡野知十らの回顧録で有名な貸本屋池田屋清吉を取り上げる。池田屋は第1章でも触れるところがあるが、本節では明治14年刊本の表紙裏に貼り込まれた文書の断片から、蔵書内容や営業の様相を析出するとともに、「家計簿」から暮らし向きまで明らかにしようとしている。明治前期から中期頃にかけての貸本屋のリアルが描き出される。

第3節「近代金沢における書籍受容と春田書店」では、金沢尾張町で明治末から大正期にかけて営業していた貸本屋兼古本屋の春田書店を取り上げる。石川県立図書館辻家貸本文庫に同書店の旧蔵本が多数収められており、その分析をとおして、その蔵書内容や営業全体の様相を明らかにしている。また金沢という地域における当時の書籍受容の実態についても分析している。

3 本論文についての評価

3.1 テーマ設定

貸本業界は書籍流通の重要な回路の一つで、娯楽的読書、すなわち小説類の受容を支えてきた機構である。貸本屋は小説読者にとってもっとも身近で頼りになる本屋であり、日常に欠かせぬ存在であった。この流通末端を介して小説類は流通していたわけで、彼ら貸本業者の存在によって多くの小説類の出版が可能となっていたと言える。民間の文化的営為、また文学史を構想する場合、この業界についての考察は不可欠である。

にも関わらず、貸本屋についてはこれまで研究の蓄積が多いとは言えず、近年は大きな成果も出ていない。長友千代治らの40年以上前の成果にすぎているのが現状である。その中で本論文のテーマ設定は時宜を得たものであり、また書籍文化史領域の研究に大きく寄与する試みであると言える。

とくに貸本問屋については貸本業界の中核となる存在でありながらも、これまでまともな研究が一本も無く、これを研究の柱として取り上げたところは意欲的であるとともに、書籍業界全体の動きを捉える上でも有効な方法であったと評価できる。

3.2 研究方法

これまで貸本屋についての研究があまり進展しなかった理由の第一は資料が限られていたところによるであろう。零細な個人営業がほとんどである貸本屋のまとまった営業文書がそのまま残ることはまずありえない。また、その蔵書がまともに残っていることもほとんど無かろう。

つまり、研究の進展に寄与するような資料との出会いの困難さが容易に想像できるゆえに、また貸本印や注意書きのような片々たる資料の収集、データの蓄積と整理に膨大な時間を要することも容易に想像できるゆえに敬遠されてきた研究分野なのである。また研究蓄積が乏しく、個々の業者の営業実態、貸本業全体、またその歴史的変化という全体像が見通せないということも大きな壁であったと思われる。加えて、何が資料となりうるのか、どこでそれを得られるのかという資料収集の方法が確立していないということも研究の進展を阻んできた要素のひとつであったろう。

以上のように一定期間のうちに研究成果を出すことが困難だと思われてきた分野であるが、論者は、先行研究を十全に咀嚼し、この分野の研究にこれまで何が不足しているか、またそれを克服するために、何が必要かということをもまず把握するところから始めている。

また本論文が用いた資料は、その多くが論者が時間と労力をかけて収集したものである。それに加えて調査を重ねて実見したものである。どの資料も単独では十分に事態全体を物語るとは言えない片々たるものである。しかし、それらを根気よく収集し史料化することによって、断片的な情報をつなげ、大きな世界を浮かび上がらせることに成功している。また、先行研究、既出の関連資料の十全な把握から、第1章第1節のような、新たな資料出現が望めそうもないテーマについてもそれらを用いて補完することを可能としている。

3.3 論文形式

本論文の多くの部分は、学術雑誌にこれまで公表してきた論文に基づいている。したがって、各節ごとに完成されたひとつの世界を形成していて、その節の意図するところが明瞭に理解できるようになっている。かといって、ばらばらの論考の吹き寄せとはなっておらず、各節密接な連関をもって、全体で大きな世界を形作っている。それは、大きな構想のもとにこれまで個別の論文を公表してきたことによるとともに、本論文を仕上げるに際して、入念に手入れが行われて各節との連絡が図られているからである。

文章も達意のもので読みやすい。誤変換等日本語の乱れも見当たらず丁寧な推敲を経たものであることがわかる。また構成も整然としている。すなわち、第1章は本論文全体のメインテーマである江戸（東京）の貸本問屋についての論を時代を追ってまとめ、第2章は基礎データを配置して第1章理解の参考資料となっている。第3章は、貸本問屋から書籍の供給を受ける流通末端の貸本屋の地域・時代の異なる事例を置き、貸本問屋から書籍享受者への書籍の流れと時代による変化をたどるようになっている。

ただし、書籍関連の専門的な事柄が多岐にわたり、また対象とした時代の幅も広く、この分野に明るくない人間にとっては理解がやや難しいものであるとも言えよう。それは、資料に基づく確かなことしか述べないという抑制的な論述スタイルにも因るものであろう。各章末に、章全体の意義をわかりやすくまとめた小括があってもよかったと思われる。

3.4 独自性と意義

これまでも述べてきたように貸本問屋についての研究はこれまで無く、独自の方法で貸本業の機構の解明に迫ろうとしたものとして大いに評価できる。膨大な出版書の調査に基づいて版元でもある貸本問屋丁子屋平兵衛・大島屋伝右衛門・大川屋錠吉個別の事績をここまで丁寧に追った研究もこれまで全く無かったもので、書籍文化史研究の前進に大きく寄与する確かな成果であるといえる。

多く零細な営業で、その実態を個別にはなかなか把握できない流通末端の貸本屋の事例研究も貴重なものである。用いた資料は断片的なものながら、それを補完する資料や知見を動員して、具体的な日々の営業と生活ぶりを描き出すとともに、顧客つまり小説読者の存在様態、嗜好についても浮かび上がらせている。事例をこつこつと積み上げていかななくてはならない貸本屋研究の前進に新たな一歩が加わった形である。

本論文が、論者が博搜して収集した多くの新資料によって論じられた意義も極めて大きい。論者が発掘した新資料の紹介、またその資料に基づく清新な論は極めて貴重である。それぞれがほぼ新たな知見ということになるのである。古びることなく、後進に引かれ続けることになるであろう。

以上のように、本論文は、これまでの書籍文化史研究の欠を埋めるとともに、新たな資料と方法を提示し、関連する研究の推進力と充分になりうるものとして評価できる。

4 今後の課題

本論文の終章にも述べられているが、まず上方の貸本問屋についての研究の深化が図られるべきであろう。東西の貸本問屋間における書籍流通の実態解明は、江戸（東京）の貸本問屋の営業への理解をさらに深めるであろうし、事態の変化を全国規模で捉えることにつながるようになるはずである。

終章では、大正以降の貸本問屋の研究が未着手であること、またさらに近代貸本文化に関わる事例の蓄積を図るべきことが課題としてあげられている。それはそのとおりで今後なされてしかるであろう。しかし、他にも課題はあろう。たとえば時代の他のさまざまな文化や産業の諸状況とその推移の中に貸本文化を定位して相関を見定めるような考察もさらに深めていく必要がある。また、貸本文化の真の主役であるところの書籍享受者についてももっと掘り下げた考察が必要であると思われる。つまり、彼らは均一・固定的な存在ではなく、その層は時代とともに大きな変化をしていくし、地域による偏差も大きいと思われる。彼らの動きを凝視しながら貸本業の推移を見ていく必要があるし、貸本業界の変化から民間において何が起きているのか洞察する視点も得られるものと思われるのである。大きな課題であるが、今後の研究の進展に期待したいところである。

もちろん、資料渉猟の手（足？）は今後も休ませるべきではなかろう。本論文で紹介した各資料が物語っているように新たな資料の発掘は不可能なことではなく、それは新たな視座の確保につながるであろう。資料博搜の高い能力を今後も発揮し続けてもらいたい。

5 結論

以上のように、本論文は多大の時間と労力をかけた力作であり、この分野の研究を大きく前進させる画期的なものであると評価できる。よって、本論文をもって松永瑠成氏に博士（文学）の学位を授与することが適当であると審査委員一同判断するものである。